様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成 22 年 6 月 3 日現在

研究種目：若手研究（B）
研究期間：2008～2009
課題番号：20720026
研究課題名（和文） 江戸時代の文人画と題画文学の研究－大雅・蕪村・高陽を中心に
研究課題名（英文） Research on Colophons, Inscriptions and Paintings of Edo-Period Literati Artists: Taiga, Buson, and Kôyô

研究代表者
吉田　恵理（YOSHIDA　ERI）
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：00364993

研究成果の概要（和文）：
文人画の基礎研究としてのデータベース作りを行った。美術史の分野において、画と賛の総合的研究は、その重要性が指摘されながらも、とくに日本文人画の大成者とされる池大雅(1723-76)・与謝蕪村(1716-84)、および、同時代に江戸でも活躍した中山高陽(1717-80)作品におけるそれについては未だ基礎研究が十分ではなかった。
本研究により、大雅、蕪村作品については、既に刊行された文献をベースに題画文学のデータベースを作成、特に重要な作品については作品調査を実施した。また大雅、蕪村に比べて基礎研究がたちおくれている中山高陽については、画賛のあるなしに関わらず、全貌をつかむための作品の実地調査、基礎文献の調査、粉本調査を実施した。
研究期間中に論文発表はできなかったが大雅は、珍しい画題や賛であっても、狩野派にもある画題とそれに伴う賛が記される場合が多く、版本で流布していたであろう漢詩などからとった賛が多い。これに比して蕪村は、例えば「移石動雲根」など、同時代や前後の時代を見回しても、類例のない画題や題画詩が記された事例が散見される。また、中山高陽については一方で真景図についての自画賛が作品数の割合から考えると量があるが、総じて言えることは、故事人物において珍しい画題が多い。また、同じように自画賛の作品が多いといえるかとおもわれる。
本研究の基礎となる資料はほぼ集めることができたが、ひきつづき、地道に画賛と作品をつけあわせてゆくことで、文人画研究の基盤づくりができるものと考える。

研究成果の概要（英文）：
For this study, I produced a database of fundamental research on Edo-period literati paintings. Although the importance of comprehensive research on paintings and colophons is recognized in the field of art history, there is still a need for more basic research, not only in the case of the acclaimed so-called major Japanese literati artists Ike no Taiga (1723-76) and Yosa no Buson (1716- 84), but also the lesser known Nakayama Kôyô (1717-80), who was active in Edo during the same period.
In this research, I started with published references for Taiga’s and Buson’s works, created a database of painting subjects and inscriptions, and examined the most important works in person. As research on Nakayama Kôyô and his works is less advanced than research on Taiga and Buson and their works, I researched all Kôyô’s works regardless of whether or not they have colophons or inscriptions. For the database on Kôyô’s works, I included research on paintings examined first-hand, fundamental bibliographic research, as well

as painting sketches or studies (*funpon)* in order to attain an overview of his oeuvre.

As a result, I discovered that Taiga's painting subjects and inscriptions, although generally quite unusual and perceived as exotic during their time, occasionally overlap with painting subjects and inscriptions seen in works produced by artists of the Kano School, the orthodox painting tradition established during the Momoyama and early Edo periods that produced painting subjects and styles favored by the military elite. There are also many inscriptions in Taiga's paintings taken from Chinese verse that must have been readily available in printed publications of the time. Conversely in the case of Buson, for example his painting with the title "*Iseki do unkon* 移石動雲根," there are many instances when his painting subjects and inscribed poems are unprecedented, during his time and after.

In Nakayama Kôyô's known works, there are a relatively large number of self-inscribed "true-view" paintings (*shinkeizu*) based on observed landscapes, but it could be said in general that there are more paintings featuring unusual ancient legendary or historical figure subjects in his oeuvre when compared to Taiga's or Buson's works. In addition, it could be said that Kôyô's paintings, many of which are self-inscribed (rather than collaborative or inscribed by friends or acquaintances), functioned as a scholar's vehicle for personal self-expression.

This study has gathered together fundamental data and materials for researching paintings with inscriptions by Taiga, Buson, and Kôyô. Next comes the work of matching recorded inscriptions to extant paintings and conducting further research to analyze and interpret the relationships between texts and images in individual works. In this way, I hope my work will contribute to future research of Edo-period literati paintings.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,100,000 円	330,000 円	1,430,000 円
2009 年度	700,000 円	210,000 円	910,000 円
年度			
年度			
年度			
総　計	1,800,000 円	540,000 円	2,340,000 円

研究分野：美術史
科研費の分科・細目：美学・美術史
キーワード：文人画、題画文学、池大雅、与謝蕪村、中山高陽、画賛、題跋、粉本

１．研究開始当初の背景

江戸時代の文人画は、いうまでもなく東洋絵画の特質とも言える「詩、書、画」が一体となってできた芸術であり、絵画のみを考察しても、それに付随する題画文学（賛、跋など）を読み込み、絵画とともに鑑賞、考究し

なければ、作品の本質に迫ることはできない分野である。しかしながら、基礎研究段階でなされるべき賛や題語、跋文の読みについては、未だ十分ではなく、まとまった研究書なども刊行されていない。

その中にあって竹谷長二郎『文人画家田能村竹田「自画題語」訳釈を中心に』明治書院、1981 年、『大分県先哲叢書』など田能村竹田研究において、範となる研究書が刊行されており、近年、徳田武氏、池澤一郎氏ら日本の近世文学の研究者による業績も出された。それらに触発され、かつて拙稿（池大雅筆「洞庭赤壁図巻」の表現と賞翫の場『美術史』155 号、2003 年）で題・跋の検討から作品のソースを抽出し大雅の絵画制作の在り方と鑑賞の場の一つを明らかにしたが、この時、同時に、日本の文人画が大成したとされる江戸時代中期における、文人画と題画文学の研究は、江戸後期（文化文政期）のそれに比べて、さらに薄いことを痛感した。

２．研究の目的

中世日本絵画研究においては、島田修二郎・入谷義高監修『禅林画賛　中世水墨画を読む』毎日新聞社、1987 年がある。本研究の最終目標は、『禅林画賛』の江戸時代文人画バージョン、いわば『文人画賛』を作成することとしたい。各作品の賛や題、跋など、いわゆる題画文学のデータベースを構築し、江戸時代の文人画研究の基礎資料を作成することで、当時の日本の文人画の制作と鑑賞の場に迫り、文人画の時代的特色とその変遷、画家個人の特色、人的ネットワークを浮き彫りにし、中国文化受容の様相を明らかにしたいと考えている。そこで、今回の研究では最終目標に向う前段階、基礎作りとして、できる限り作品調査をすすめ、データ収集および賛、題、跋の解読を行う。その際、日本文人画の大成者とされる池大雅や与謝蕪村に加え彼らとほぼ同時代に生き、土佐出身で江戸でも活躍した中山高陽にも注目し、3 者を比較することで、江戸時代中期の中国文化受容の様相を画家の個性と地域文化の特性の双方から考察することを目的とする。

３．研究の方法

基礎作業として、大雅、蕪村作品については、既存の文献に翻刻された題画文学（賛、題、跋など）のデータ入力作業とともに、必要な作品の実地調査（熟覧）を行った。中山高陽については、実地調査からはじめた。

主なデータ入力文献は下記の通り。

『池大雅画譜』全 5 巻、中央公論美術出版社、
松下英麿『池大雅』春秋社
『蕪村全集（絵画編）』講談社、『没後 220 年蕪村』逸翁美術館・柿衛文庫
雑誌『南画鑑賞』、雑誌『南画研究』

中山高陽については細野正信「中山高陽研究」東京、を基礎に、データ入力を行いつつ、集中的に実地調査をし、データ収集を行った。主な調査地は、高陽の出身地である高知県内の機関（高知県立美術館、土佐山内家宝物資料館、佐川町立青山文庫、高知市民図書館）、関西所蔵家、都内関連機関、アメリカの大学美術館である。同時にこの作品調査の成果とともに『高陽山人自画題語』『高陽山人詩稿』『高陽山人名印一夕方話』など基本文献資料を入手し、作品に記された画賛について校合作業を行っている。

データベースは下記のような項目立てとした。

作者名、作品名、法量、形状材質、落款・印章、賛、題、跋、箱書（表、裏）、付属資料、伝来、掲載文献・展覧会、画題キーワード（匿名山水、真景図、故事人物、肖像画、花鳥、中国画題、日本画題、その他）、画法キーワード（水墨、浅降、青緑、金碧青緑、その他）、関係人物の系統（儒者、僧侶、俳人、医師、その他）、賛の出典、作品評価（A・B・C）。なお、本データベースは未定稿であり、現在も構築中である。

４．研究成果

研究課題のうち、大雅・蕪村に比べ基礎研究が遅れている中山高陽について集中的に作品調査、関連資料、文献調査を実施し、在外作品（アメリカの文人画研究における主要大学美術館など）の調査を実施できた。高陽については、細野正信氏の研究以降、美術史学会において際立った研究の進展がなかったが、この度の作品調査で、在外調査で新出作品に出合うことができたほか、高知県内の旧家に所蔵され、所在不明であった作品などが発見された。また高知市民図書館所蔵の粉本について全作品の写真撮影をすることができ、中山高陽研究に必要な基礎資料をある程度収集することができた。粉本については他に高知県内の個人所蔵のものがあるようだが、これについても今後調査の機会をもてればと考えている。これらを分析することにより、研究課題の「題画文学」の問題のみならず、それ以前の大前提である高陽研究にとって意義があると考える。

また、ある意味において文人画研究（中国絵画研究の一環であったとおもわれるが）のメッカであった、アメリカ・ミシガン大学、カンサス大学の付属美術館の所蔵品および、メトロポリタン美術館など、アメリカの文人画研究において主要な機関の所蔵品調査を実施できたことも有意義であった。

大雅、蕪村、についてはカタログレゾネ的要素を持った『池大雅作品集』『蕪村全集』などを中心に既に知られている作品の画讃を収集、データベース作成中であり、おおま

かではあるが、題画文学とともに、画題について、それぞれの特徴がうかびあがってきた。
　大雅は、どちらかといえば、一世代前の狩野派にもある画題とそれに伴う賛が記される場合が多く、『唐詩選』など版本で流布していたであろう漢詩の賛が多い。これに比して蕪村は、例えば「移石動雲根」など、同時代や前後の時代を見回しても、類例のない画題や題画詩が記された事例が散見される。また、中山高陽については一方で真景図についての自画賛が作品数の割合から考えると量があるが、総じて言えることは、故事人物において珍しい画題が多い。また、同じように自画賛の作品が多い。
　これらについて、一つには、大雅は書家であり画家で、京都で活躍したのに対し、蕪村は画家であり俳人で初期には大雅よりも江戸の文化の傘下にあったこと、高陽は画家でもあるが、基本的には儒者あるいは漢詩人、俳人と考えた方がよく、蕪村よりもさらに江戸の文化の中で生きていたことにその要員があるだろう。
　本研究で、当初、課題の一つにあげた、画賛（題画文学）の出典調査については思うようにすすまなかった。これらが進めば、3 者の特徴がその原因とともに浮かび上がってくると思われる。
　いずれにしても、研究の基礎となる資料はほぼ集めることができた。助成期間は終了したが、ひきつづき、地道に画賛と作品をつけあわせてゆくことで、文人画研究の基盤づくりができるものと考える。
　なお、私事であるが、研究期間途中で所属が変わるなど、申請当初予定していた研究環境とことなる状況が生まれ、研究機関内に論文などの業績を発表することがかなわなかった。しかし、上記に記した内容についてはいずれデータベースの公開、論文発表をしたいと考えている。また、池大雅については本研究課題に相応しい作品が再発見されたという情報を得、幸い作品調査をすることができた。現在、修復を終え、平成 22 年秋に所蔵者により展示公開される予定である。この作品については、これ以降、論文などの発表を予定している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

特になし

６．研究組織
(1)研究代表者
吉田　恵理（YOSHIDA　ERI）
京都造形芸術大学・芸術学部・非常勤講師
研究者番号：00364993